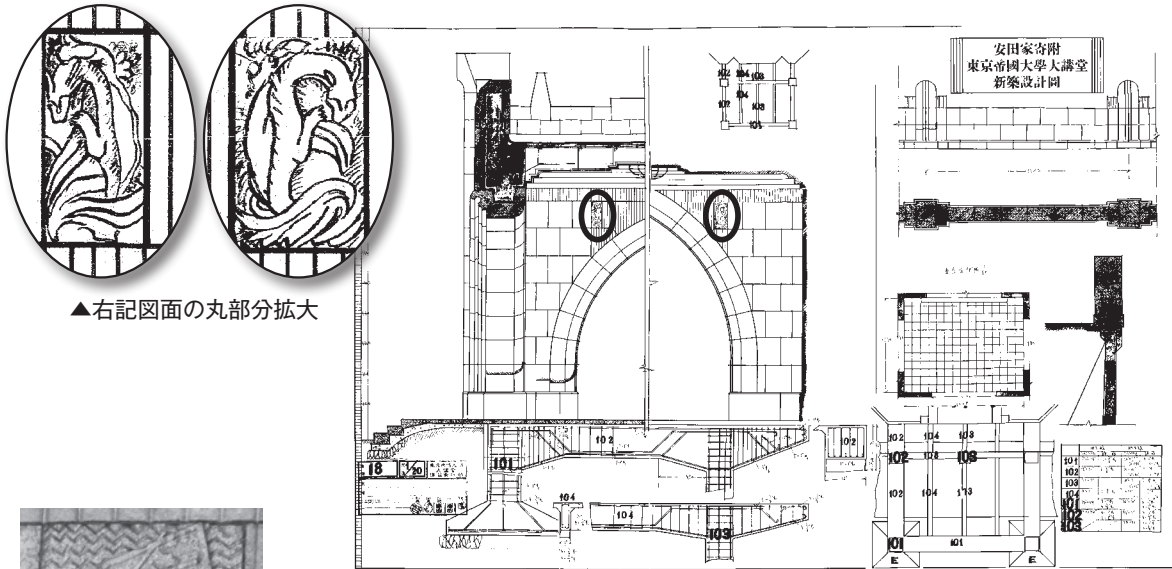


東京大学史史料室ニュース

第47号 2011・11・30

目次

大学史史料室を大学文書館に.....	2
本郷キャンパス探訪－大講堂車寄せ内レリーフについて－.....	4
受贈図書一覧.....	6
史料室日誌抄録.....	8



▲右記図面の丸部分拡大

▲東京帝國大学大講堂車寄せ詳細図（其二）（原図縮尺20分の1）、施設部蔵



▲大講堂車寄せ内レリーフ

上記平面図は大講堂車寄せ内のレリーフに関するものとして提供された、施設部所蔵史料『東京帝国大学大講堂（工事請負契約ニ添附シタル図面）』（簿冊の目次冒頭に記載）の中の「車寄せ詳細図（其二）」である。

大講堂建築委員会建築実行部長塚本靖、内田祥三（同建築掛長）、岸田日出刀（同技師）らの認印と日付（大正11年11月25日）が見られる。

図面・写真にはレリーフがある場所を丸印で示した。

はじめに

昨年11月より東京大学史史料室長に就任しました。私の史料室長としての使命は、東京大学史史料室を東京大学文書館に発展させることです。

東京大学史史料室は、1987年、東京大学百年史編纂事業で収集された膨大な資料群を基礎に、大学史アーカイブの先駆けをなすものとして開設されました。当時、大学史アーカイブを独立の組織として置いていた大学は国内では珍しく、東京大学がこのような大学史への本格的な取り組みをいち早く始めたのは大いに誇りとすべきことでした。しかし、その後の本史料室の歩みは、必ずしも順風満帆ではありませんでした。大綱化や大学院重点化、国立大学法人化といった大学改革の激流のなかで、学内の歴史的資料の保全や活用の基盤を整えることは、どちらかというと後回しにされてきたように思えます。

東京大学でアーカイブへの取り組みが停滞気味であったこの十数年間、他方で京都大学をはじめとする他の国立大学は、それぞれの大学資料保存のための本格的な取り組みを始め、一気に大学文書館やそれに相当する施設を整備していきました。これは一つには、東京大学が創立100年を迎えたのが1977年であったのに対し、京都大学の創立100年は1997年、広島大学をはじめ多くの地方国立大学が創立50年を迎えたのが1999年で、90年代末に大学の50周年、100周年ブームが到来したことも関係しているでしょう。

折しも2000年代に入り、公文書管理法制定へと向かう流れのなかで、国や自治体レベルの公文書館に対応するものとして、大学文書館を整備する動きも広がっていきました。実際、京都大学は2000年、国内の大学では初めて百周年時計台記念館のなかに大学文書館を設置し、大学史史料のみならず大学の公文書・法人文書の保存体制を整備しました。東京大学は大学アーカイブへの取り組みでは京都大学の後塵を拝しており、今や京大をはじめとする多くの大学の取り組みから素直に学ぶべきです。

公文書管理法への対応

なぜ、大学史史料室を大学文書館に発展させなければならないのか — その理由を3つ挙げておきましょう。第1は、いうまでもなく公文書管理法への対応です。公文書管理法は、2007年に起きた年金記録問題でずさんな公文書管理が明らかとなり、福田内閣の下

で法制化が進められたものですが、2011年4月から施行され、公的機関は保存期限切れの非現用文書についての十全な保存管理体制を築かなければならなくなりました。すでに多くの国立大学が、新法の施行に対応した新たな文書管理体制を整備しつつあります。

凡その試算によれば、東京大学全学で保有されている法人文書は約16万ファイル、そのうち保存期限切れの非現用文書として廃棄されるのは毎年約15,000ファイルと見込まれています。もちろん、この15,000のファイルすべてを保存するのは不可能ですから、このなかで保存すべきものと廃棄されるものが選別されることになります。文書ファイルは、その種別に従って「1年保存」から「30年保存」までランクが分かれていますから、「5年保存」程度までの文書で大学文書館が永久に保存していかなければならなくなる文書は相対的には少ないと想像されます。しかし、「10年保存」以上の長期保存文書に限定しても、その数は3,000ファイルに上り、これを定常的に選別し、重要なものは文書館で半永久的に保存していく体制の整備が急務です。

どの文書を廃棄し、どの文書を保存すべきなのか — ポイントは、膨大な保存期限切れになる法人文書の保存と廃棄についての全学統一的なガイドラインを早急に策定することです。すでに、公文書管理法への対応のなかで各省庁や公的機関で同様のガイドラインが作成されていますから、それらを参考にできるでしょう。しかし、同時にさらに3つのことが早急になされなければなりません。第1は、保存した文書と廃棄した文書の記録をすべて残し、後から簡易に確認できるようにすることです。第2は、全学の各部署で保管されている法人文書が保存期限切れになった際、上記の統一的な基準に従って大学文書館に集められてくる体制を整えることです。第3は、そのようにして法人文書についての選別が日常的になされるため、全学としての法人文書の保存や廃棄を担う職員が養成されていくことです。これらの一連の課題を担う中核として、大学文書館が必要です。

デジタル化への対応

大学史史料室から大学文書館への発展が必要なもう1つの理由は、デジタル化です。デジタル化の進展により、様々な資料保存のあり方が根本から変化しつつあります。大学文書館との関係で重要なことを要約す

れば、第1は、デジタルデータ形式で保存活用が可能な資料の総量が劇的に拡大したことであり、第2は、原資料の半永久的保存とデジタルデータの世界規模での利活用を分離できるようになったことであり、第3は、MLA連携をはじめインターネットの活用により文書館相互、それに文書館と図書館、博物館の連携による資料の総合化が容易になったことです。

このうち第1のポイントはいうまでもありません。保存スペースの制約から、今後とも大学資料のなかで現物を半永久的保存できるものは限られます。仮に将来の東京大学文書館のスペースを現状並みの500㎡とすると、法人文書の収蔵が加わればあっという間に書庫は満杯になってしまいます。倍の1000㎡の保存スペースを確保できれば、ある程度時間幅で保存体制を整えることができます。それでも現物保存ができるのは、収集可能な文書のごく一部にすぎません。重要でも廃棄しなければならない資料が相当量出てくることは避けられません。しかし、デジタル形式であればほとんど無限の保存能力がありますから、大学文書館としては、デジタルと現物の両方で保存するもの、デジタルだけで保存するもの、廃棄するものの3段階で資料の選別をしていかなければなりません。

大学文書館に蓄積される資料が広く社会的に活用されていく上で、第2のポイントは重要です。図書館とは異なり、文書館に蓄積される資料は形態もまちまちで、紙質等も安定しないものが多く、多くの人々が原資料をそのまま閲覧するのが適していない場合もあります。デジタルアーカイブ化は、原資料はそのまま保管し、そのデジタルデータに幅広い人々が離れた場所から利用することを可能にします。保存と利活用を分離することで、蓄積された文書への社会的なアクセシビリティを劇的に高めることができます。

第3に、東京大学には、附属図書館、総合研究博物館という2つの全学的なアーカイブ系施設があります。東京大学文書館は、当然ながらこれら先輩格の施設と連携していくこととなります。いわば東大版MLA (Museum/Library/Archive) 連携と実践することが目指されており、図書・出版物は図書館、遺物やモノは博物館、個人と法人の文書資料は文書館という分業体制のなかで、本学の知識基盤をさらに高度化していくことができるはずです。これについては、最近、『つながる図書館、博物館、文書館 ― デジタル時代の知の基盤づくりへ』(石川徹也・根本彰・吉見俊哉編、東京大学出版会)という本に構想をまとめて出版しましたので、そちらをぜひ読んでいただきたいと思えます。

東大版MLA連携の推進に加えて必要なのは、学内に散在する研究室や研究プロジェクトが営んできたデジタルアーカイブを統合的に保存することです。1990

年代以降、各部署や研究室の研究資源をアーカイブ化する動きが広がりますが、多くの場合、事業を中心的に担った教授が退職すると、せっかく構築されたアーカイブの管理が行き届かなくなり、十分に活用されないまま消えることもあります。これは東京大学として損失なので、すでに構築されたアーカイブを大学の資産として全学的な知識基盤のなかに組み込んで長期的に維持管理していく体制を生みだしていく必要があります。ただしこれは、大学文書館と大学図書館のどちらの仕事であるのかは微妙で、もしも大学図書館のなかにこれらの研究資源の統合的アーカイブ化の体制が整うならば、そちらがふさわしいかもしれません。いずれにせよ、これは上記の東大版MLAのどこかが必ず担うべき機能です。

『東京大学百五十年史』の編纂

以上のように、東京大学史史料室を東京大学文書館に改組することで新組織が担っていくべき役割には、①非現用法人文書保存に関するガイドライン策定と期限切れ文書の調査、②大学史史料及び法人文書の保存環境の整備と目録化、③保存資料に関する公開サービスと展示、④大学史史料に関するデジタルアーカイブ化、⑤学内学術研究資源の統合アーカイブ化、⑥アーキビスト養成教育プログラムの支援、⑦東京大学における自校史教育の支援、⑧歴代総長等のオーラル・ヒルトリーの収集等々が含まれますが、これらにも増して重要な役割がもう一つあります。それは、『東京大学百五十年史』の編纂です。

東京大学は2027年、今から約15年後に創立150年を迎えます。これまで『東京帝国大学五十年史』『東京大学百年史』がそれぞれの歴史の節目に編まれてきた以上、創立150年の節目に『百五十年史』を編むことは、大学としての使命です。そして、『百年史』が、ほぼ大学紛争の前で叙述を終えている以上、15年後までに編まれる『百五十年史』は、安田講堂の攻防を含む「紛争」や90年代以降の大学改革の記述を含まなければなりません。しかも、それは単に『百年史』に50年分の記述を加えるだけでなく、今日の歴史記述についての考え方の変化やメディア技術上の変化を踏まえ、「大学史」の書かれ方そのものに新しい地平を拓くものとなるべきです。大学史史料室から大学文書館への発展は、そうしたためにも不可欠の前提で、しかもこれは今から準備を始めて決して遅くはないのです。

(よしみ しゅんや：東京大学史史料室長)

本郷キャンパス探訪 —大講堂車寄せ内レリーフについて—

村上 こそえ

はじめに

弊室ニュース第36号で、本郷キャンパスの2つの不思議についてご紹介させていただきました。(細谷恵子、谷本宗生著「本郷キャンパス史の探訪：育徳園丘上の碑と赤門鬼瓦の『學』に関して」, 2006) 今回は、弊室があります大講堂の不思議についてお話し致します。

大講堂は、当時の東京帝国大学に正式な便殿、すなわち天皇が行幸する際の臨時の休息所や講堂の設備がないことを知った故安田善次郎氏からの寄付によって建てられ(大正14年竣工)、そのことに由来し通称「安田講堂」と呼ばれています。

表紙掲載写真のレリーフは大講堂正面車寄せ内の三方(入口以外)に1対の形で飾られています。耳か角のようなものが2本あり、ヒゲらしきものが左右に3本、顔の下には3本指のようなものがあります。画面いっぱい押し込まれているような形で首を曲げ、膝を折って座っている姿にも見え、その周りはジグザグ模様で埋めてあります。このレリーフの生物の正体に今回は迫りたいと思います。

レリーフのデザイナーは？

生物がなんであるかという疑問と同時に、一体誰がこのレリーフをデザインしたのかという疑問もあります。大講堂の設計者、もしくは別の誰かなのでしょうか。

まずは、弊室にある内田祥三(工学部教授、第14代総長)史料や大講堂の図面にあたってみました。関連するようなものを得ることができず、施設部保全課にご協力いただき、車寄せ内のレリーフが描かれている図面2点を見せていただきました。1点は『東京帝国大学大講堂(工事請負契約ニ添付シタル図面)』の中の図面「車寄詳細図(其二)」(表紙掲載)、もう1点は『東京帝国大学大講堂(実施図面)』の中の図面です。「工事請負契約ニ添付シタル図面」に描かれているレリーフの図像は、現在見られるようなものでなく、もっとそのもの(生物の)形に近く描かれています。図面にある捺印を見ると内田の門下生であった岸田日出刀(後に工学部教授)が図面を書いていることが分かります。もう1点の「実施図面」のレリーフ部分を見ると、現在見られる直線的なデザインが鉛筆書きの簡単なスケッチのまま墨入れされずに残っています。果たしてこのデザインは誰の手によるものなのでしょうか。

大講堂の基本設計を行った内田は、中山法華経寺聖教殿(昭和6年竣工)を設計しています。『内田祥三先生作品集』(内田祥三先生眉寿祝賀記念作品集刊行会編、鹿島研究所出版会、1969)によると、その際デ

ザイナーとして躊躇なく伊東忠太を推薦し、伊東から彫刻をつけたいと相談を受けた時は東大総合図書館正面アーケードの動植物のレリーフを制作した新海竹蔵がよいと言ったとあるように、レリーフのデザインも設計者でない可能性が高そうです。また、同じ本の中で、東大総合図書館は「大講堂建設スタッフが再び起用された」ともあるので、伊東と新海竹蔵がデザインした可能性もあるかもしれません。

図面をさらに見てみますと、2つの図面に変化があるものに車寄せ内の照明のデザインがあります。「工事請負契約ニ添付シタル図面」には照明の周りに唐草模様のようなものが描かれていますが、「実施図面」では現在ある幾何学的なデザインに変わっています。唐草模様を幾何学的にデザインしたものなのでしょうか。レリーフも同様に幾何学的に表現し直されたのでしょうか。

弊室刊行『東京大学史紀要』19号から26号の8回にわたり、内田祥三談話速記録を掲載しました。その26号で、聞き手である村松貞次郎(当時、生産技術研究所助教授)が大講堂の写真を内田に見せながら話しをしており、大講堂の照明がモダンだということに対して内田は「これは新海(竹太郎)君の、これは本来伊東先生一人のデザインということにしてもいいが、もしくは共同の、もしくは計算はほくがすべてやりましたが。」と話しています。どの照明かについては触れられていませんが、車寄せの照明も伊東と新海竹太郎(以後、名字のみは「新海竹太郎」)がデザインした可能性があります。

車寄せ内のレリーフから少し話はそれますが、伊東は新海が作った銅像の台座設計を幾度も手掛けており、二人の共同作業によって成った作品の一つが本郷キャンパス内工学部1号館前庭にあります。工部大学校造家学科教師ジョサイア・コンドル Josiah Conder 像(新海作、大正11年)の台座(写真1)です。

台座の設計にはジョサイアの孫弟子にあたる伊東も加わっており、台座に地震の象徴とされる邪鬼二体を置いたのは、日本の建築の耐震化に尽くしたジョサイアを讃える意味を込めたといわれています。



写真1：ジョサイア・コンドル像台座部分拡大

『彫刻家・新海竹太郎論』(田中修二著、東北出版企画、2002)に、コンドル像の雛型の写真が掲載されて

いました。実物や詳細が分かる写真を確認できていませんのではっきりとは言えませんが、邪鬼が押し込められている石は現在のように横ではなく縦に置かれ、二体は波状の曲線を挟み、膝を折り向き合って座っている姿のように見えます。

また、工学部4号館には新海作の工科大学採鉱冶金学科教授渡辺渡の胸像（大正11年、工学部所蔵）があり、その台座部分にも人のような獅子のような目の鋭い生物の顔が直線的な線で彫られています。このデザインに伊東が関係しているかどうかは現時点では明らかではありませんが、大講堂の車寄せ内レリーフ同様不思議なデザインです。

大講堂照明のデザインの話、コンドル像の台座に彫られた邪鬼の姿や渡辺渡像の台座に彫られている顔について考えてみると、大講堂の車寄せ内のレリーフも伊東と新海（もしくは二人の一方）がデザインに関わっているかもしれません。そこで、二人が関わっていた場合にレリーフの生物はなんであるかについて仮説を立ててみました。

仮説1. 龍

講堂内（講堂の舞台と廊下）には小杉未醒の壁画が飾られていますが、当初は便殿内にも藤島武二による壁画が三方に飾られる予定であったようです。藤島は大正13年11月3日の帝国大学新聞に記事を寄せており、その中で「東洋的であって欲しいという大学当事者の御注文もあった」としています。

弊室にある内田史料の中に『東京帝国大学大講堂建築概要（大正十四年七月）』がありますが、その中の「十五、関係職員」の中に、

尚建築物ノ意匠及構造ニ関シテハ 東大教授伊東忠太氏、同佐野利器氏ニ協議員ヲ依頼シテ建築設計ノ大綱ニ就キ協議シ、壁画ニ関シテハ 東大教授松本亦太郎、同姉崎正治、同伊東忠太、同瀧精一ノ四氏ヲ其協議員ニ依頼シテ掲出場所等ニ就キ協議セリ。

とあります。

藤島に東洋的にと依頼したのは恐らく「壁画ニ関スル協議員」であり、その中の一人であった伊東の意見もあったと想像できます。東洋的なデザインをレリーフも踏襲していると、生物の隙間を埋めるジグザグ模様が波を幾何学的に表しているのだとしたら龍ではないかと推測されます。中国では龍は皇帝を表し、その意味からも大講堂にふさわしいレリーフのようにも思います。

また、日本の伝統文様に「角龍(かくりゅう)」という、目をむき出し、魚風の尾を持つ龍を方形に表した文様がありますが、レリーフと類似点があるようにも思えます。

伊東や新海説ではなく、設計者である内田の意思が反映されているとしたら、内田は耐火耐震をうたっていたので、水の神様である龍をファサード内に置くこ

とで、火災から建物を守る守護神として置かれた可能性も考えられます。

これらの理由から、龍ではないかというのが一つ目の仮説です。

仮説2. 獅子（狛犬・ライオン）

一對の生物が車寄せ内の三方にあり、神社や寺院の門前にある獅子同様、悪しきものが中に入らぬよう正面入り口全てを見張っているのでしょうか。一對のレリーフは阿吽の形はとっていないことから、もし獅子だとすると西洋系の獅子となります。『伊東忠太動物園』（藤森照信編・文；増田彰久写真；伊東忠太絵・文、筑摩書房、1995）の中で「西洋のライオン像は、百獣の王にちなんでの王権や精神的な最高位の象徴としての意味をまず第一にもっている。」とあり、大講堂が建てられた目的にそのままあてはまるようにも考えられます。また、同じ本の中で伊東がデザインをした旧真宗信徒生命保険会社（明治45年竣工）の敷地の柵の親柱の上にある像について述べている部分があります。

この一連の動物像には例外なく肩から後に伸びるものが刻まれているが、デザインは二つに分かれ、末端が巻き毛状に納まるものは獅子の例にみられるようにタテガミを、スッパリ切れて終わるものは、怪鳥の例にみられるように翼をさす。

表紙の図の生物は左右少々異なるデザインですが、末端が巻き毛状になっているように見えます。伊東は、獅子の形は勝手に捏造して良いとしており、いわゆる「獅子」と言えるものとは少し離れているようにも思いますが、もしかしたら獅子ではないかというのが二つ目の仮説です。

その他にも、少しずる賢いような印象を受ける顔立ちから狐とも考えられますし、伊東がデザインに関わっているならば、伊東が考えた空想的動物を図案化したものかもしれません。

おわりに

今回の調査では、残念ながら真相に到達することはできませんでした。しかしながら、専門家のご意見を伺うよりも、弊室にある史料と施設部から提供いただきました図面を手掛かりとして、レリーフの正体についてあれこれと諸説推測させていただきました。今回の調査にあたり、弊室にある様々な史料を紐解きましたが、その中には別な案件で興味深いものが確認できました。このレリーフの正体についても一見関係のないように思われる史料の中に答えが記されている可能性もあります。さらなる史料整理に励み、その中でみつけた興味深いことや「本郷キャンパスの不思議」についてご紹介できたらと思っています。

（むらかみ こずえ：東京大学史史料室事務補佐員）

受贈図書一覧（抄）（平成23年2月～平成23年7月）

青山学院大学五十年史 資料編、青山学院大学五十年史 青山学院大学学長室 平成15年11月, 平成23年3月	工学院大学学園一二五年史資料ニュース 第四号 平成23年3月 工学院大学創立125周年記念事業事務室内125年史編纂委員会事務局
同窓会通信 第5号, 第6号 一高同窓会 平成23年2月, 5月	校史 Vol.21 平成23年3月 國學院大學研究開発推進機構 校史・学術資産研究センター
大学史資料室ニュース 第15号 大阪市立大学大学史資料室 平成23年3月	國學院大學院友會百二十年史 財団法人國學院大學院友會 平成22年11月
中岡省治名誉教授に聞く-大阪外国語大学の思い出- (2) 大阪大学文書館設置準備室 平成22年9月	国史館史研究年報 楓原 2010 第二号 学校法人国史館 国史館史資料室 平成23年3月
創立百周年記念事業小樽商科大学の歴史へタイムスリップ 小樽商科大学附属図書館 平成23年3月	国史館創立者柴田徳次郎生誕120周年 -教育者柴田徳次郎の生涯- 学校法人国史館 国史館史資料室 平成22年10月
学習院女子中等科女子高等科125年史 桑尾光太郎 (学習院アーカイブズ) 平成22年11月	アーカイブズ 第43号, 第44号 独立行政法人国立公文書館 平成23年3月, 6月
霞城館だより No.52 財団法人霞城館 平成22年7月	北の丸—国立公文書館報— 第四十三号 独立行政法人国立公文書館 平成23年2月
神奈川大学会議録 (十二) 第二十七集 神奈川大学資料編纂室 平成23年3月	公文書館専門職員養成課程修了研究論文集 平成22年度 独立行政法人国立公文書館
金沢大学資料館紀要 第6号 金沢大学資料館 平成23年3月	駒澤大学禅文化歴史博物館年次報告書 (平成21年度) 駒澤大学禅文化歴史博物館 平成22年5月
金沢大学資料館だより 第36号 金沢大学資料館 平成23年3月	「図書館誌」にみる駒大図書館史【その6】 駒澤大学禅文化歴史博物館 平成22年10月
関西学院史紀要 第十七号 関西学院学院史編纂室 平成23年3月	佐佐木信綱記念館だより 第25号 佐佐木信綱記念館 平成23年3月
関西大学年史紀要 第二十号 関西大学年史編纂室 平成23年3月	稿本神陵史 高等科編 (財) 三高自昭会 平成23年3月
京都大学大学文書館研究紀要 第9号 京都大学大学文書館 平成23年2月	神陵文庫・神陵文庫紅萌抄 合本X (財) 三高自昭会 平成23年4月
京都大学の歴史 第二版 京都大学大学文書館 平成23年3月	専修大学史紀要 第3号 専修大学 大学史資料課 平成23年3月
『戦後学生運動関係資料』Ⅲ 解説・目録 京都大学大学文書館 平成23年3月	西南学院史紀要 Vol. 6 学校法人西南学院 平成23年5月
近代日本研究 第27巻 (2010年度) 慶應義塾福澤研究センター 平成23年2月	大学アーカイブズ No.44 全国大学史資料協議会東日本部会 平成23年3月
慶應義塾福澤研究センター通信 第14号 慶應義塾福澤研究センター 平成23年3月	法学者・穂積陳重と妻・歌子の物語 ～洪沢栄一のひ孫・穂積重行氏オーラルヒストリーから～ 洪沢史料館 平成23年3月
福澤論吉事典 別巻2 慶應義塾福澤研究センター 平成22年12月	

台湾・東洋協会研究 東洋文科協會五十年史稿 拓殖大学創立百年史編纂室	平成23年 3月	大学史編纂課だより 第1号 日本大学広報部大学史編纂課	平成23年 3月
拓殖大学百年史 昭和前編 拓殖大学創立百年史編纂室	平成23年 3月	日本大学のあゆみ 第一巻, 第二巻 日本大学広報部大学史編纂課	平成23年 2月, 3月
タイムトラベル中大125 中央大学入学センター事務部大学史編纂課	平成23年 1月	沖原豊関係文書目録 広島大学文書館	平成23年 3月
中央大学史紀要 第十六号 中央大学入学センター事務部大学史編纂課	平成23年 3月	原井郁雄オーラル・ヒストリー 被爆の思い出・戦争の無い世界を 広島大学文書館	平成22年12月
航空科学専門学校開設認可申請書類 1 東海大学学術資料センター	平成23年 4月	広島大学自校史教育実施報告書2001～2010(上巻) 広島大学文書館	平成23年 3月
東京大学教育学部六十年史 東京大学大学院教育学研究科・教育学部	平成23年 3月	広島大学文書館紀要 第13号 広島大学文書館	平成23年 3月
ロシア国立海軍文書館所蔵日本関係資料解説目録 東京大学史料編纂所 副所長保谷徹	平成23年 3月	北海道大学大学文書館年報 第6号 北海道大学大学文書館	平成23年 3月
生誕150年記念 横井時敬の遺産 東京農業大学世田谷学術情報センター(図書館)	平成23年 3月	Archive&Archives 03 武蔵野美術大学 大学史史料室	平成23年 3月
東北学院資料室 vol.10, 第10号別冊 東北学院	平成23年 4月	武蔵学園史年報 第十六号 武蔵学園記念室	平成23年 3月
東北大学史料館紀要 第6号 東北大学学術資源研究公開センター史料館	平成23年 3月	大学史活動 第32集, 第33集 平成22年12月, 平成23年 5月 明治大学総務部総務課(大学史資料センター)	
東北大学史料館だより 第14号 東北大学学術資源研究公開センター史料館	平成23年 3月	桃山学院年史紀要 第30号 桃山学院史料室	平成23年 3月
名古屋大学大学文書資料室紀要 第19号 名古屋大学大学文書資料室	平成23年 3月	開港のひろば 第112号 横浜開港資料館	平成23年 4月
名古屋大学大学文書資料室ニュース 第28号 名古屋大学大学文書資料室	平成23年 3月	立教学院史研究 第8号 立教学院史資料センター	平成23年 3月
名大祭-50年のあゆみ- 14 名古屋大学大学文書資料室	平成23年 3月	立命館平和研究-立命館大学国際平和ミュージアム紀要 第12号 立命館大学国際平和ミュージアム	平成23年 3月
アルケイア-記録・情報・歴史- 第5号 南山大学史料室	平成23年 3月	龍谷大学史報 vol.11 龍谷大学大学史資料室	平成23年 3月
お雇いドイツ人理化学教師C.ワグネルの生い立ちと修学歴について 小澤健志	平成23年	鈴木重禮と麻生慶次郎-草創期の土壌肥科学者 松永俊朗(農研機構 中央農業総合研究センター)	平成23年
戦時下学問の統制と動員-日本諸学振興委員会の研究- 奈須恵子(立教大学)	平成23年 3月	『哲学字彙』にみられる近代学術用語の 現代日本語への定着過程の検証 真田治子(立正大学経済学部)	平成23年 3月
巽誌(コウシ) 第6号 日本大学広報部大学史編纂課	平成23年 3月		

史料室日誌抄録（平成 23 年 2 月～平成 23 年 7 月）

- 2月7日（月） 教育学部清水ゼミ見学のため来室。
2月15日（火） 第1回大学史料収集・管理の在り方に関するWG開催（大講堂会議室）。
2月16日（水） 情報学環小川ゼミ見学のため来室。
3月3日（木） 第1回大学史史料室室員会議開催（史料室）。
3月8日（火） 情報学環小川ゼミ見学のため来室。
3月11日（金） 第2回大学史料収集・管理の在り方に関するWG開催（本部棟会議室）。
3月22日（火） 『東京大学史史料室ニュース』第46号刊行、発送。
『東京大学史紀要』第29号刊行、発送。
3月31日（木） 『加藤弘之史料目録 増補版』刊行。
教務補佐員、山口理沙退職。
5月～7月 月1～2回、国際資料研究所小川千代子先生との打ち合わせ（史料室）。
5月9日（月） 大学史史料室実務者会合開催（本部棟会議室）。
5月11日（水）～5月16日（月）
所蔵史料の分量確認作業。
5月27日（金） 第2回大学史史料室室員会議開催（史料室）。
6月2日（木） 『留学生関係』他の中性紙箱詰め作業実施。
6月17日（金） 第3回大学史料収集・管理の在り方に関するWG開催（本部棟会議室）。
6月30日（木） 第3回大学史史料室室員会議開催（史料室）。
7月14日（木） 吉見室長、谷本室員、小川室員、文化庁との打合せ（史料室）。
7月15日（金） 清水理事視察のため来室。
7月22日（金） 資産課より、旧蔵資料受取り。
7月28日（木） 第4回大学史料収集・管理の在り方に関するWG開催（本部棟会議室）。

この間の閲覧者数

学内者 7名
学外者 18名

主な学外閲覧者所属機関

お茶の水女子大学、近畿大学、工学院大学、専修大学、玉川聖学院、中央大学、東京農業大学、
東京理科大学、獨協同窓会、立教大学

その他

文献撮影・複写許可件数 18件
調査（照会）件数 57件

お詫びと訂正

2011年3月発行の「東京大学史紀要 第29号」におきまして記載ミスがございました。
お詫びして訂正させていただきます。ご理解のほど、よろしくお願い致します。

英タイトル

誤 Iinuma
正 Iimura

題字 森 巨元総長

東京大学史史料室ニュース 第47号

発行日：2011年11月30日（年2回発行）

編集・発行：東京大学史史料室

東京都文京区本郷7-3-1

電話：03（5841）2077（直）

印刷所：株式会社 ワーナー

Archives Section of the University of Tokyo

千葉市稲毛区六方町13-2